全カリシンポジウム2013
「知のコラボレーション～主題別Bの魅力～」を終えて

溜箭　将之

全カリの運営チームのメンバーとなって2年目の私だが、まだ「総合」「主題別」「領域別」「A/B」などの新旧符号に戸惑うことも少なくない。2005年に立教大学に着任した私は、全カリの成立の経緯、また主題別Bの成り立ちも知らない教員の1人である。

その私でも、これまで運営チームで仕事をする中で、主題別Bが醸す熱気については、独特のものを感じていた。しかし、それが全カリの始まった時代からの熱気なのか、チームリーダーの中島先生の思い入れから来る熱気なのか、同時に池袋と新座をインターネットで結ぶような新たな取り組みが伝える熱気なのか。本号に収録されたシンポジウムをお読みになれば、その熱気はもっとダイナミックであることが分かる。

シンポジウムの冒頭から主題別Bのもつ熱気を表現するのが、村上先生の「全学部の学生の皆さんを対象に、もっと言うならば、全学部の先生方も対象に」伝えたいというメッセージだろう。食べ物の比喩を借りれば、主題別Bの熱気は、調理場で食材が光り、刃物が刻み、中華鍋から炎が上がり、料理人の声が飛び交う、そうした調理場の熱気を彷彿とさせる。それも、今のメニューに新たな構想を加えてゆこうという、ダイナミックな調理場である。「講師の中でも新たな発見があって、研究プロジェクトがつながったりしていく」というのだから。学生も、メニューを見てナイフとフォークを前にのんびり待っていることは期待されない。調理場に通されるのである。

個人的には、安松先生の「スポーツというのは非常に学際的な領域ですので」、とさらりと表現されたところに、はっとさせられた。自分のスポーツ観が固定観念だったことに気づかされたのだ。「逆に、このスポーツがこの北欧モデルに対しては１つの見え方になるということで、逆の矢印になって貢献できるというところがまた楽しいところかなと思っています。」ここでも、教員が楽しんでいる。

中島先生が、今の主題別Bが、学生にすり寄っているのではないかと問題提起をするところがある。担当の村上先生や細井先生は、野暮な言い訳はしていない。「教員にとっての魅力ですね」とさらに主題別Bとその授業に関係する研究に込める熱意が展開される。寺﨑先生が、学生は分かっているのだろうか、というくらい、主題別Bは、学生にすり寄るどころか、突き抜けているかのようである。もちろん寺﨑先生の指摘は、シンポジウムの報告に感動しました、という発言の中でのことであり、中島先生の「本日の話を聞き、全カリのチームリーダーとしての使命感が若干動揺しました」というコメントも、同じ文脈にある。

私は今、料理人が帰り、磨かれた鍋が鈍い光を反射している調理場にいる。主題別Bという調理場は、その出発の理念として多様な観点をもった料理人が集まる場を提供している。本シ

ンポジウムは、その調理場に集まった教員とゲストスピーカーが、今の時代の要請のもとで、新たな試みをして学生を巻き込んでゆく、そうした熱気が迸るものになったと考えている。

最後になりますが、このシンポジウムにご協力くださった先生方、また日頃から主題別Bに熱気を下さっている先生方に感謝を申し上げます。

たまるや　まさゆき
（本学法学部准教授／総合教育科目
構想・運営チームメンバー）

※なお、筆録内「事例報告①」（PP.31－35）の内容については、「事例報告　遠隔共同講義システムの利用事例」（PP.77－80）でも述べられている。